嬉野市（うれしの）（佐賀県）

100年の念願「新幹線開業後」のまちづくり!!
官学民の連携で推進する持続可能な近未来の構築

「100年の念願」成就は「次の100年」への出発点

佐賀県南西部に位置する嬉野市は、平成18（2006）年1月1日、旧藤津郡嬉野町・同塩田町の2町合併により、新市としての歩みを開始した。嬉野町と塩田町は、江戸時代に旧豊前国・小倉と旧肥前国・長崎を結んだ長崎街道において、隣接する宿場町（嬉野宿・塩田宿）として共に栄えた歴史を持つ。

長崎街道は九州全域の大名家による参勤交代、長崎・出島のオランダ商館長による江戸参府の旅などの主要街道でもあり、小倉～長崎間の全長57里（224㎞弱）の街道筋に、25の宿場町を形成した。

そのうち嬉野宿は、江戸時代初期から栽培されてきた嬉野茶（うれしの茶）の産地、戦国時代末期から生産が始まった陶磁器・肥前吉田焼の産地、名湯・嬉野温泉を擁する温泉町としても繁栄した。

やはり陶磁器（志田焼）の里で知られた塩田宿は、長崎街道の脇往還・塩田道の起点としても繁栄した。また、嬉野宿・塩田宿を貫流し、有明海に注ぐ塩田川の川湊・塩田津は、周辺で産出される焼き物（志田焼、肥前吉田焼、有田で産する伊万里焼／有田焼など）や、嬉野茶など農産物の物流拠点としての役割も果たしていた。

こうした歴史的背景の下、塩田町地区の中心部には、当時の繁栄を伝える白壁造りの町家（白しっくいの居蔵家）や豪商の館、古寺社などが保全され、平成17（2005）年には国の伝統的建造物群保存地区に指定されている。また、嬉野町地区には茶畑風景や伝統的で閑雅な雰囲気の温泉街が保持されており、両地区は、誰もが懐かしさを覚える「レトロなまち並み」が観光客の人気を集めている。

このように際立った個性の両地区を合わせ持つ嬉野市は、多彩な観光資源・地域資源に恵まれていると言える。半面、両地区を一つのエリアとして捉えようとした場合、恵まれた観光資源・地域資源を有機的に活用しつつ、

村上大祐（むらかみだいすけ）
嬉野市長
（嬉野温泉駅前にて）

回遊性の実現やバランスの取れた発展を図っていくのに不可欠な、両地区をつなぎ、ハブ的な役割を果たす「決定的な交流拠点」の存在が、これまでは足りなかった。

だが現在、国道34号（鳥栖市～長崎市を結ぶ旧長崎街道の一部に相当）沿いの、嬉野町地区と塩田町地区のほぼ中間点に当たるエリアにおいて、両地区を結ぶ《第三の都市核》とも言うべきスマートシティづくり、内外の訪問客の観光交流拠点となる全く新たなまちづくりが、つち音も高らかに始まっている。

第三の都市核の主軸を成すのは、令和4（2022）年9月23日に暫定開業（博多駅～長崎駅を結ぶ九州新幹線・西九州ルート約143㎞のうち武雄温泉駅～長崎駅間約66㎞が先行開業）した西九州新幹線と、新駅・嬉野温泉駅の存在だ。今後は、嬉野町地区と塩田町地区を結ぶハブ的役割だけでなく、全国主要都市と嬉野市を結ぶ交流結節点となることも期待されている。

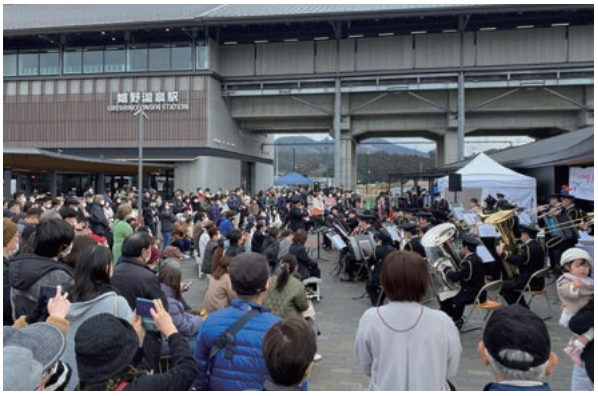
「私たち嬉野市民にとって、西九州新幹線の暫定開業と嬉野温泉駅の供用開始は、まさに『100年の念願』がかなった瞬間でした」

そう語るのは、村上大祐嬉野市長だ。村上市長は、広島県尾道市出身で九州大学に進学。卒業後は佐賀新聞社の記者、同伊万里支局長などを経て、平成30（2018）年1月の嬉野市長選に出馬し、35歳で当選。取材時の本年2月から、2期6年目に入った。

「実は現在の嬉野市エリアには、大正4（1915）年に開業して、昭和6（1931）年に廃線となった私鉄《肥前電気鉄道》（嬉野駅～塩田駅間、9駅・約9・8㎞）が走っていました。肥前電気鉄道は長崎本線（鳥栖駅～長崎駅間・約123㎞）と連結する計画も立てられ認可を得ていましたが、昭和恐慌による景気の悪化や、バス路線との競合に伴う利用者減などにより、短期間で廃業の憂き目を見ることになってしまったのです」（村上市長）

さらに、肥前電気鉄道が敷設される以前、全国各地に鉄道路線が続々誕生していった明治時代後半、嬉野にも幹線鉄道・長崎本線を延伸する計画が持ち上がった。しかし、当時の嬉野の人々には、鉄道ができると、嬉野温泉への湯治客が素通りしてしまうのではないかなどの懸念があり、結果的に反対論の意見が大勢を占め、鉄道敷設の話は立ち消えになった。そのことに対する後悔は世代を超えて語り継がれ、特に明治時代の長崎本線延伸計画の消滅については、昭和前半期編さんの『嬉野町史』に『百年の悔いを残した（※原文ママ）』との文言が記されたほどだという。

「しかし、今ついに、100年来の念願である幹線鉄道および鉄道駅の誘致がかないました。しかも、将来的には博多と長崎を直結する、九州新幹線・西九州ルート（西九州新幹線）の停車駅として誕生しました。西九州ルートが全通すれば、嬉野温泉駅は博多駅・熊本駅・鹿児島中央駅などを結ぶ九州新幹線（鹿児島ルート）との連携で、九州全域を網羅



本年2月11日開催「嬉野温泉駅まつり」には大勢の市民が駆け付け、新幹線開業を改めて祝った

白しっくいの町家や蔵が建ち並ぶ「塩田津」のまち並み

嬉野温泉駅に停車中の西九州新幹線「かもめ号」の雄姿

嬉野茶に触れ、学び、味わい、体感できる「うれしの茶交流館 チャオシル」は平成30年オープン

15世紀半ばに栽培が始まった嬉野茶は独自の釜いり技術による製茶で瞬く間に日本の代表的なお茶に

する高速鉄道網に組み込まれます。東海道・山陽新幹線や東北・上越・北陸・北海道新幹線とつながる、日本全域を網羅した新幹線網の一員としても位置付けられます。

それだけに今、この時代を生きる私たちは、先人たちが渇望してきた『積年の想い』の成就を、ただ享受するだけでなく、西九州新幹線の開業を軸に、わがまちの『次の100年間』に向けた持続可能なまちづくりへの《未来構想》をしっかりと打ち立て、実践していく責務があると考えております」(村上市長)

同時多発的に展開される「新幹線開業後」のまちづくり

西九州新幹線（武雄温泉～嬉野温泉～新大村～諫早～長崎）の暫定開業が「令和4年秋」と決まったのは令和2（2020）年のこと。それ以前は、開業時期が幾度も変更されるなど情報が錯綜（さくそう）する中、嬉野市は「武雄温泉～嬉野温泉～諫早間」の部分着工認可が下りた平成20（2008）年3月に、「新幹線嬉野温泉駅周辺整備基本計画」を策定。嬉野温泉駅から嬉野町地区の既成市街地までの区域（11・4ha）での土地区画整理事業に着手した（駅周辺部分は約2ha）。

その後、平成24（2012）年6月に「諫早～長崎間」の着工が認可され、西九州新幹線暫定開業の全工区の事業概要が整ったのを受け、嬉野温泉駅周辺の新たなまちづくり構想を検討する官学民協働の「まちづくり委員会（委員長／佐賀大学理工学部・三島伸雄教授）」が、平成26（2014）年度に発足。土地区画整理事業と並行して、開発の方向性を固める議論を平成28（2016）年度まで徹底的に重ね、駅周辺整備の基本スキームを完成させた。

「嬉野温泉駅の周辺整備について、嬉野市では『《健康と癒しのまち》をアピールするための新たなスタートポイント』とするという方針の下、全てを官学民連携で進めてまいりました。嬉野市が主体となるのは、観光インフォメーション機能を担う観光交流施設や駅前広場、公園の整備などで、民間主導の事業としては、宿泊施設、飲食施設、特産品販売所の整備などが挙げられます」(村上市長)

施設整備の現況は、嬉野市が主体の観光文化交流施設《まるくアイズ》や手湯・足湯付き公園、休憩所と道路情報・観光情報を提供する施設などの整備が完成済みだ。

さらに一帯全域が、令和4年2月に《道の駅うれしの まるく》として登録された。《道の駅うれしの まるく》《まるくアイズ》の《まるく》

地元のカフェが運営するカフェ＆特産物販売施設「アップリフト シモジュク」

は、「丸く、円く」とドイツ語の「市場（マルクト／英語のマーケット）」に由来するという。

《道の駅うれしの まるく》は、画期的な道の駅としても、関係各方面から注目されている。例えば、手ぶら観光を掲げ、手荷物を宿泊先に500円で配送するサービスや、スマホ決済で借りられるシェアサイクルやカーシェアリング、VRゴーグルを使った観光案内などがある。

さらに、道の駅を単なる物販・飲食の集積施設でなく、《健康と癒しのまち・嬉野市》をアピールするための新たなスタートポイント、地域観光の玄関機能に徹した形で整備しようとしていることも特徴的だ。道の駅への集客と同等以上に、嬉野市の力点は、市内外への回遊性の「起点創出」に置かれているのだ。

民間主導の整備事業では、飲食や特産品販売の《アップリフト シモジュク》が完成済みだ。今夏には、《積水ハウス》が施工し、アメリカのホテル大手《マリオット・インターナショナル》が運営する、ホテル《フェアフィールド・バイ・マリオット》が開業の予定だ。

「フェアフィールド・バイ・マリオットは、レストランなどを併設しない宿泊特化型のホテルです。駅前整備における《健康と癒しのまち》をアピールするスタートポイントの理念を体現したホテル、とも言えます。例えば、このホテルに泊まる旅行者の方々には、ここを起点に食事や買い物は駅前の施設で楽しんでいただく。さらに観光情報や道路情報も駅前でゲットしていただき、嬉野温泉や塩田津方面への旅に出発していただくというイメージです」（村上市長）

コロナ禍の落ち着きと共に、ウィズコロナ時代が本格化し始めている現在、長崎港への外国クルーズ船寄港の復活や、長崎経由のインバウンド需要への期待も膨らむ。その際にも、この宿泊特化型ホテルは新たな観光風景をもたらしそうだ。

例えば、嬉野市は昨年11月、嬉野温泉駅前で最新のAI技術を用いた自動運転シャトルバスなど、次世代モビリティの試乗会（未来技術地域実装事業）を行った。内外の観光客が、嬉野温泉駅を起点に、自動運転の次世代モビリティで市内のレトロなまち並みを訪れる光景は、想像するだけでも楽しい。

今夏に開業予定の宿泊特化型ホテル「フェアフィールド・バイ・マリオット」

新幹線とシュガーロードが導く 現代・近未来版「長崎街道」の繁栄

西九州新幹線の開業は、令和2年6月19日付けで文化庁から認定された日本遺産《砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～（以下、日本遺産シュガーロード）》に関連する取り組みを、より一層活性化させる契機になることも期待されている。前述のように、小倉～長崎を結ぶ長崎街道は、単なる幹線街道ではなかった。参勤交代の大名も利用し、長崎・出島のオランダ商館長が、不定期的に

令和2年の日本遺産シュガーロード認定記念スイーツの一つ「うれしののどらむすこ」（どら焼き）

嬉野オフィスビルへの入居企業は嬉野市との立地協定締結が条件。地域に根付く意志を持つ企業だけが入れる

建設中から問い合わせが殺到するなど大人気!!　嬉野駅に隣接する「嬉野オフィスビル（企業誘致ビル）」

江戸参府する際の主要街道としても機能した。そのため、長崎からは西洋貿易経由で、小倉からは中国貿易経由で到来した菓子などが同時に行き来し、当時の日本ではぜいたく品だった砂糖を多用する文化が、浸透する要因にもなった。日本遺産シュガーロードの参加都市（シュガーロード連絡協議会／長崎県長崎市、同諫早市、同大村市、佐賀県嬉野市、同小城市、同佐賀市、福岡県飯塚市、同北九州市）には、江戸時代に到来した外国由来の砂糖菓子や、砂糖を多用した伝統料理などが今も伝わっている。嬉野市の場合には、伝統的な砂糖菓子「金華糖（きんかとう）」や「逸口香（いっこうこう）」、砂糖をたっぷり使った正月料理の「ふなんこぐい」、砂糖を熱燗（あつかん）の酒に入れた「砂糖酒」などだ。

西九州新幹線が全通すれば、シュガーロード連絡協議会の全ての都市との連携による広域観光が、より一層活性化していくことになるはずだ。実際、「既にそれぞれのまちを起点に、シュガーロードを巡るツアー企画も活発に動き出しており、シュガーロードにまつわる独自の砂糖文化が再び脚光を浴びつつあります」（村上市長）

西九州新幹線開業は沿線5市の広域連携も活性化させている。令和4年9月1日には、長崎市、大村市、諫早市、嬉野市、武雄市の共同企画で、オリジナルフレームの開業記念切手が長崎県・佐賀県内で限定発売された。沿線5市の広域連携は本年5月のゴールデンウイークや夏休みなどを経て、より活発化することだろう。

このように、西九州新幹線の開業や日本遺産シュガーロードを要因とする広域的取り組みを見ていくと、西九州新幹線は「現代・近未来版の長崎街道」の役割を果たそうとしていることが分かる。

ところで、村上市長の市長就任（平成29／2017年度末）は、西九州新幹線開業後の新たなまちづくり構想を構築する「嬉野温泉駅周辺整備」の基本スキームを、官学民協働のまちづくり委員会が平成28年度に完成させた翌年度のことだ。このときの市長選は、嬉野市民にとって「100年来の念願」である「鉄道＝西九州新幹線開業後のまちづくり」のけん引役を誰に委ねるかという、非常に重大な選択だった。その選挙に35歳の若さで、村上市長があえて新聞社を退社してまで、出馬を決意したのはなぜなのだろう。

「私が地元紙の記者になった平成18年春は、嬉野市が誕生した直後のこと。以来、客観的に見守り続けてきた嬉野市の数々の魅力にひかれ、私は嬉野市に居を定めました。そして《嬉野市まち・ひと・しごと創生総合戦略》の策定（平成27／2015年）に、市内在住の民間委員として参加したことで、改めて嬉野市の多様な可能性に気付きました。折しもそこに、西九州新幹線と嬉野温泉駅の誕生という重大なファクターが加わった。この歴史的分岐点に当たり、大好きな嬉野市の近未来のまちづくりに、記者生活で培った経験を還元し、地域の発展に貢献したい。そう思ったのです」（村上市長）

女性活躍社会推進を目指す嬉野市は「女子野球タウン構想」に基づき女子野球も応援（九州女子硬式野球リーグ交流事業風景）

嬉野市

（佐賀県）

令和4年稼働の施設園芸団地「スマートアグリ宮ノ元」は農業再活性化の基盤（入植者第1号・トマト農家の収穫作業風景）

次世代育成の一環、タブレット端末活用の「オンライン英会話」は令和4年から市内全小学校で実施中

西九州新幹線開業後のまちづくりは、緒に就いたばかりだ。第三の都市核を創る駅周辺の整備だけでも、完遂するまでにはかなりの時間を必要とする。しかし、西九州新幹線および嬉野温泉駅の開業、駅周辺やまちなかで始まった整備事業がもたらす刺激の効果は、観光面以外にも既に多方面で表面化し始めている。

例えば、嬉野温泉駅周辺整備事業エリアの一角に、令和2年建設の嬉野オフィスビル（企業誘致ビル）がある。このビル建設事業は前出の総合戦略策定の際に、民間委員として村上市長が提言した企画が基になっている。全7区画中6区画が入居済みまたは入居予定（IT企業4社）で、残りわずか1区画という人気ぶりだ（※本年2月時点）。

また、本年8月の将棋タイトル戦「伊藤園お～いお茶杯第64期王位戦」（藤井聡太王位の防衛戦）の会場で、嬉野温泉を代表する老舗旅館・和多屋別荘では、サテライトオフィスやワーケーションルームを開設。市外企業の誘致活動を独自に実施するなど、西九州新幹線開業後のまちづくりに呼応する地元企業の事例も続出しつつある。

さらに西九州新幹線の開業前、昨年6月に公開された東洋経済新報社「住みよさランキング2022」（子育て編）において、嬉野市は全国17位（佐賀県内1位）となっている。嬉野市は、子育て世代からの注目を既に集めている訳だが、昨年10月からは「英語をシャワーのように浴び、使える英語を獲得する」ことを目的に、タブレット端末活用のオンライン英会話授業（小学校）も始まった。

DXやBPR、RPAなどの導入への取り組みを中心に、先端技術の積極的な活用、いろいろな意味での合理化による市役所の組織的な体質改善にも、積極的に取り組んでいる。

先端技術を用いた取り組みとしては、塩田町宮ノ元地区に整備されつつある施設園芸団地「スマートアグリ宮ノ元」（全9区画）事業も注目される。この「全国最先端の（農業）技能集積団地を目指す取り組み」（村上市長）では、昨年7月に1区画だけ先行入植したトマト農家（入植者はJAさがが運営する高度研修施設・トレーニングファーム出身が条件）が、昨年末に記念すべき初収穫にこぎつけている。本年度中には、全9区画の整備が完了の予定で、今後の展開が楽しみだ。

このような諸事例の集積による、地道なまちづくりへの総合的成果は前出「住みよさランキング」にも反映しているはずだが、そうした「暮らしやすさ」への客観的な高評価に、これからは新幹線開業後のまちづくりによる「新たな成果」が加わっていくことになる。

「数々の魅力的な地域資源に恵まれた、嬉野市の本領発揮は、まさにこれから」（村上市長）と言えるだろう。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和5年2月1日）

人気の公衆温泉浴場「シーボルトの湯（嬉野温泉）」。名称の由来は江戸参府の途中にあの医師シーボルトがこの地の泉質調査をしたことから